The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四三年一月-四月 期待された両大家の「国民文学」と〈非国民〉としての「鉄面皮」
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 20-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼1月

・2日、ニューギニア島ブナの日本軍守備隊全滅。

・9日、南京政府、英米に宣戦布告。

・11日、英米、重慶政府と条約締結。

・14日、英米首脳、カサブランカで会談、日独伊の無条件降伏要求で合意。

▼2月

・1日、日本軍、ガダルカナル島から「転進」。

・1日、米、日系二世による部隊の編成を発表。

・2日、スターリングラードの独軍降伏。

▼3月

・13日、東条英機、南京政府と会見し、戦争完遂を約す。

▼4月

・18日、山本五十六、ソロモンで戦死。

一九四三年一月―四月　期待された両大家の「国民文学」と〈非国民〉としての「鉄面皮」／小澤純

「中央公論」新年号には島崎藤村「東方の門」と谷崎潤一郎「細雪」の第一回が同時掲載された。「後記」では、「事変」から久しく「国民文学の正しきあり方」を待ち侘びた「我等後進」が「両巨豪」へと向ける期待が強調される。二大看板が交互に誌面を飾る計画が「（つゞく次回　三月号）」「（つゞく次回　四月号）」の表記から窺われる。しかし「細雪」は軍部の指導で第二回以降が掲載見合わせとなり、「東方の門」は藤村の死によって一〇月号で中絶する。ただ、「国民文学」と名指された二作への反響が大きかったことは確かだ。

佐々木基一「青春の文学（文芸時評）」（「日本評論」二月）は、冒頭で「歴史を綜合的に描き出」す「東方の門」を取り上げ、「過ぎ去つた歴史を振りかへり、様々な時勢にめぐり合つて来た人間のいとなみや願ひに思ひを馳せ」る藤村の心境を評価する。四迷・鷗外・光太郎・直哉の青春文学を並べながら、「歴史」を語る際には「現在への痛切な体験と反省」が抜け落ちない「青春の情熱」を維持し、同時に「昭和十年前後、あの文芸復興と呼ばれた時代」の「青春の挫折」も自覚すべきことが主張される。明治期以来の「青春」の堆積の上に『夜明け前』に続く歴史小説を執筆する藤村への敬意に裏打ちされた議論である。福田恆存「文芸時評　文学至上主義的風潮について」（「新潮」二月）も、報道班員達の「文学至上主義的感傷」を批判しつつ、「東方の門」に「明治以来半世紀に亘つて民族の心の動きを先導し」た「大きく豊かな魂の息吹」を感じ、「若々しい情熱に深い感動を覚え」る。市川為雄「国土と文学―文芸時評―」（「文藝主潮」三月）の「この作家が歴史小説を国土への愛として描いてゐる姿を見」たと感じた点も、「国民文学」的枠組みの近傍にあろう。

対照的なのは宮内寒彌「或る暗示」（「新潮」二月）で、作家達に「白紙令書」が届いた一昨年の出来事を描く尾崎士郎「朝暮兵」（「改造」一月）を読んだ「感慨無量」と比べ、「東方の門」は「歴史の教科書でも無理に読まされてゐるやう」だと漏らす。しかし「細雪」については、「如何にも軟文学」だが「ふざけた感じは勿論のこと、この戦時下になど

【社会】

▼1月

・1日、中野正剛が「戦時宰相論」で東条英機を批判し「朝日新聞」発禁。

・21日、中等学校・高等学校・大学等で修業年限を1年ずつ短縮。

▼2月

・23日、陸軍省が決戦標語「撃ちてし止まん」ポスター5万枚配布。

▼3月

・2日、兵役法改正公布、朝鮮に徴兵制実施（施行は8月1日）。

・24日、商工省に金属回収部設置、家庭の鍋など強制供出。

▼4月

・1日、樺太が内地に編入。

・12日、文化学院校主・西村伊作、不敬罪で検挙。

といふ気持など少しもな」く、「唯美的な国民文学を意図されてゐるやうな気配」があり、堀辰雄「ふるさとびと」（「新潮」一月）等と共に、「男女ないし肉親の日本的な愛情の結晶から発する光の中に、国民文学ではないまでも、戦時下に強く存在を主張し得る日本文学の方向が暗示」されたと称揚する。ただこうした評価軸は、例えば伊藤整「文芸時評「細雪」を読む」（「東京新聞」三・八）が、「倒錯的な心理」が表に出ないことで「作品が清潔になり、まつとうになり」「作家が立派に見え」た印象の裡に覚えた「一種の不安」に接続するのではないか。この文脈の中に、「ふるさとびと」と同誌同号に掲載された太宰の「故郷」、さらには「気の弱い男の子が、それでも、人の手本にならなければならぬと気取つて」と「序」でことわる『富嶽百景』（一月、新潮社）の同時代受容もあろう。

藤村と谷崎の「国民文学」化を戦時下の問題として俎上に載せるのは、花田清輝「文芸時評 ― バルトロオの歌 ―」（「現代文學」一・二八）であろう。対話形式で進むが、ボーマルシェ『セビリアの理髪師』のいかなる猫も夜は灰色になるという一節を枕に、両大家の活躍を夜の「化け猫」に見立てる。そして「東方の門」に対しては、「中央公論」の「後記」を捩って、「これは我々後進に、日本人として、今後、我々の歩くべき道を御教へになつてゐるのですよ。日本古来の伝統に平田篤胤のやうに眼をそそがなければいかん、しかし、また、それと同時にシイボルトのやうに、異国の文化にも、つよい科学的な関心をもたなければいかん、とね」と述べ、すると対話相手が「そのもつともらしいところが気に喰いませんねえ」と手厳く切り返す。「細雪」に対しても、ストリンドベリ『幽霊ソナタ』を枕に「木乃伊は四十年間、同じ場所に座つてゐます。――同じ亭主と同じ道具と同じ親類と同じ友達と」と揶揄し、谷崎の道徳は「金利生活者」のものに過ぎないと一蹴する。ところで花田は、太宰の「故郷」について、「当人は、神秘的な血のつながりでも暗示したつもりでゐる」が意味はなく「非常に非科学的」で、「かういふ狭い身辺の事実にばかり拘泥」する連中は、従軍や開拓等の「新しい現実」に放り込まれれば「現実と自分とのギャッ

【文化】

▼1月

・1日、書籍の外函廃止を実施。

・13日、情報局がジャズ等の英米音楽約1000曲の演奏禁止を決定。

・20日、静岡で遺物出土（登呂遺跡）。

▼2月

・11日、理化学研究所、大型サイクロトロンの組み立てを完了。

▼3月

・23日、黒澤明監督初作品「姿三四郎」（東宝）封切。

▼4月

・28日、東京大学野球連盟が解散。

【代表作】

▼1月

・太宰治「故郷」（「新潮」）

・堀辰雄「ふるさとびと」（「新潮」）

・島崎藤村「東方の門」（「中央公論」～10月で中絶）

プを「高邁な」心境にたすけを借りて埋め」る代物だと批判する。軍部はまさに、「撃ちて し止まん」を標語に採用しようとしていた。花田はトルストイ『戦争と平和』こそ「心理に救ひ」を求めず「前線や銃後の現実を堂々と料理」する「科学的」筆致であり、同誌同号に掲載された火野葦平「歩哨線」は「ちやんと戦争といふ現実」を描く「立派な作品」だが、「本当に科学的な、精密な因果律に、興味をもたない御蔭」ではと留保する。花田の本領は、こうした話題を呼び水に、横光利一『旅愁』を道徳か科学かを白黒つけようとする「身うごきできない時代」の典型例とした上で対話者二人がお互いに「灰いろ猫」だと罵り合う韜晦にあり、実は太宰の「黄村先生言行録」（「文學界」一月）に漂う生真面目さへのはぐらかしこそ、花田のスタンスに通じていたのではなかったか。例えば宮内は前掲評で、同作は太宰の「才気によつて、その面白さを売り込んで」おり「そのユウモアを解する」には至れず、さらに「戦時下の緊張した気持の中では、悪ふざけをされてゐるやうでやり切れな」いと断じられた岩倉政治「井の頭動物園」（「改造」一月）と併せて、「同じ動物のことを書いてゐるにもかかはらず、岩倉、太宰の両氏は流石、足もとにも及ばぬやうな鬼気の迫るやうな美しい文章」である「細雪」のダシにされる。だが、「関西の有閑婦女子の生活が書いてありながら、少しも非時局的な感じはしな」いと「細雪」を褒める宮内に、「悪ふざけ」という「身うごき」を感じさせた点が貴重ではないか。また徳田戯二「文芸時評　文学も決戦で征くべし」（「文藝首都」三月）でも、同作は「現実決戦下の状態の中で何か空々しい馬鹿々々しさ」や「空しさ」を持つ作品群に入れられ「既に時代的に過去の作品」と見なされるが、却って時局のみに絡め取られていない証左となっている。

三月になり、上林暁は「文芸時評」（「文藝」）で、「今年になつて、一月の話題は、島崎藤村、谷崎潤一郎二家の長篇だつたし、二月の話題は、南方に転戦して帰還した報道班作家の文章であらう」と纏めている。傾向が違う二作家が「今日の時世に、何れも争つて読まれる」原因として「貫き通した芸術家精神」等という「共通した根」があるが、「真に求

・谷崎潤一郎「細雪」（「中央公論」～3月以後は発表禁止）
・太宰治「黄村先生言行録」（「文學界」）
・大仏次郎「源実朝」（「婦人公論」～11月）
・太宰治『〈昭和名作選集28〉富嶽百景』（新潮社）

▼2月
・中島敦「弟子」（「中央公論」）
・小林秀雄「実朝」（「文學界」～6月）
・今日出海「比島従軍」（「文學界」～9月）
・岩田豊雄『海軍』（朝日新聞社）
・岸田國士『暖流』（三学書房）

▼3月
・高見順「帰っての独白」（「改造」）
・網野菊『妻たち』（東晃社）

▼4月
・太宰治「鉄面皮」（「文學界」）
・亀井勝一郎『大和古寺風物誌』（天理時報社）
・武田泰淳『司馬遷』（日本評論社）

める文学はもつとほかにある」と言い切り、話題を、従軍作家が「内的な体験」において「生死の問題を一度きつぱりと解決つけた」点へと移す。高見順のラングーン日誌の一部「子供の遊びその他」（「文藝」二月）の「死とは、自己を無にすることであり、同時に生かすことである」という箇所を引用し、「死に対して確信ある言葉は、書斎の中で頭をひねつてゐても出て来」ず、「行動人の単純率直さを身につけたこと」が報道班作家の強みであり、同時に「複雑微妙な文学の世界へ、如何に還つてゆくか」が今後の課題であるとする。

こうした期待の中で書き継がれたのが、今日出海「比島従軍」（「文學界」二～九月）等だったのではないか。第一回が掲載された号の「後記」（河上徹太郎）には、「発表舞台の殆ど無意識的な制約が、重大な影響を文章に及ぼ」す中での期待が記される。今は一九四一年から石坂洋二郎・尾崎士郎・火野葦平・三木清等と比島派遣軍第一次宣伝班員としてマニラに滞在したが、一年以上前の十二月八日の描写に始まり、その適度な距離感によって開戦時の雰囲気が再構成される。前掲『富嶽百景』の「序」には「戦地から帰つて来た人と先夜もおそくまで語り合」い「正しさ」について思いを巡らす一節があるが、太宰もまた、かつて鎌滝時代の無軌道な青春を共有し、現在は二度目の兵役につく櫻岡孝治が二月に刊行した記録文学『馬来の日記』（大日本百科全書刊行会）に「序」を書く。

太宰は「右大臣実朝」の準備を着々と進めるが、一月の「婦人公論」には大仏次郎「源実朝」の第一回が、二月の「文學界」には小林秀雄「実朝」の第一回が掲載され、時代に呼応している。歴史小説であり唯美的要素も流れ込む太宰なりの「国民文学」への参入と捉えられるが、その構想を対象化していく「鉄面皮」を小林の「実朝」第二回が載る直前の「文學界」四月号に発表する。「国民文学」からは程遠い〈私〉の「青春」を披歴した後、戦時下、執筆中の「右大臣実朝」を織り交ぜる「鉄面皮」振りを露わにしつつ、「第二国民兵の服装」によって「感心の者」と軍人に誤解され、最後は実朝の「ソレダケガ生キル道デス」で締め括ってみる。そこには花田と共有すべきはぐらかしが忍び込んでいる。